

漢代“雩祭”についての一考察

藤 田 忠

はじめに

“雩祭”に就いては既にいくつかの論稿がある。⁽¹⁾ 私も嘗て別稿⁽²⁾の中で簡単にふれたが、その典拠となるのが『春秋』の経・伝、『周禮』、『禮記』等の資料に限られるため、取扱われる時代は、周代から春秋時代乃至春秋戦国時代の雩祭である。また右の様な事情から、論考の対象になるのは、専ら祭祀儀禮としての雩祭の種類、実施時期、その方法等に限定されている。それぞれの論稿では、細部に微妙な相違を見せてはいるが、大体次のように纏めることが出来るであらう。

“雩祭”は、まずその本来的性質からして告祭であつた。そして徐々に正祭化されていった。前述の資料に現れる諸記事では、『左伝』桓公五年の「龍見而雩」と『禮記』月令、仲夏の条「命有司為民祈祀山川百源、大雩帝、用盛樂、乃命百果、雩祀百辟卿士有益於民者、以祈穀實」の二条が正祭であり、桓公五年以外の『春秋』経の二十条〈表二〉⁽³⁾や『周禮』春官の司巫・女巫等の記事はすべて告祭である。そして正祭の実施時期は、建巳（夏正四月、周正六月）乃至建午（夏

正五月、周正七月⁽⁴⁾）である。また祭禮儀式を実施するに當つて盛大な奏樂と歌舞、或いは巫の舞踏が催される。天子は上帝を、諸侯は山川百源を祭祀の対象にして降雨を求めるものである、と。

雩祭が正祭化される時期は、国家基盤が整い、君主の力が強化され、諸制度が整備されてゆく時期、つまり農耕儀禮も他の祭祀儀禮と同様に形式化、定期化されてゆく時と時を一にする。諸国が富国強兵策をとり、互いにしのぎを削る中、国力に大きな打撃を与える旱魃に対し、諸侯王が中心となり、民の結束を計りながら、出来る丈被害が大きくならぬ様に、降雨を求めるのが雩祭で、それを必要としたのが戦国時代以降であると思われる。

さて、雩祭の正祭化の時期が、今仮りに、戦国時代以前であっても、戦国時代であっても、その後より強力な皇帝権が誕生した秦、漢時代になると、雩祭は一体どの様な展開をするのかについては今まで全く説かれていない。そこでこの小稿では漢代の雩祭について考えてみることにする。

〈表一〉

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
昭公					襄公		成公	僖公	桓公	
二十 三	十八	十七	十六	八	五	七	三	十三	十一	五
秋	秋	秋	秋	秋	冬	秋	秋	秋	秋	秋
八月	八月	九月	九月	九月			九月	八月	八月	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	大雩
②	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
哀公				定公						昭公
十五	十二		七	元		二十五	二十四	十六	八	六
秋	秋		秋	秋		秋	秋	秋	秋	秋
		九月	九月	九月	季辛	七月上辛	八月	九月	九月	九月
〃	〃	〃	〃	〃	大雩	又雩	〃	〃	〃	大雩

一

『通典』卷四二～卷四五、禮二～五には、郊天以下天子宗廟に至るまでの多種多様の祭祀の名称や祭祀儀禮について記されている。そして、それらの祭祀が実際に実施されたか否かは別問題として、祭祀の起源は多く周代（周制）に求められている。

そして、これら祭祀の漢代の部分に目を転じると、祭祀は高祖、文帝、或いは武帝によって行なわれているが、その祭祀は秦代のそれを継承したものか、漢代になって新たに創設したもののどちらかであるしかし、禮三の“大雩”についてみると、

漢承秦滅学、正雩禮廢、旱、太常祝天地宗廟、

とある。正祭の雩禮は、秦始皇帝の焚書坑儒の結果、学問が減び、典禮が失われて廃れてしまった。旱害が発生すると、太常が天地宗廟に祝する、という。一見問題は無さそうであるが、他の多くの祭祀がそのまま漢代に継承されているのに、何故に雩祭だけが継承されなかったのか、種々の祭祀を実施した武帝は、雩祭を実施したのか。実施しなかったとすれば、何故に実施しなかったのであらうか、疑問の残る所である。

漢の雩祭の実施に関して、『文献通考』卷七七、郊社考十、雩の条で、馬端臨は、

按漢世未嘗舉雩祀、通典謂漢承秦滅学、正雩禮廢、而漢舊儀以為有雩壇、且指龜山沂水、以言其所、即論語言曾点樊遲所遊之地、蓋魯国祀天之所、去漢都甚遠、非国城南郊之外也、然漢人舉祀事大槩多、即前代舊祀之地、如雍五時祀上帝則因秦所建、其他如作明堂奉高旁、祀后土汾陰之類、皆以為古者嘗於其地祠祭、然豈魯沂水之雩壇舊趾尚存、漢曾就其地立壇舉雩禮邪、

と言う。馬氏は『通典』や『漢舊儀』の説を否定して、漢代は一度も雩祭を行なわなかった、と言い、ただ『漢舊儀』には、雩壇が龜山（の下）、沂水（の上流）にあり、『論語』の曾点（先進篇）、樊遲（顔淵篇）が遊んだ魯国の祀天の場所であって、漢都から非常に遠く離れていて、国城の南郊の外にあるのではない、とある。しかし、漢代に祭祀は多く行なわれたが、大抵の場合は、前代の舊祀の場所で行なっている。だとすればどうして沂水の雩壇が残っているのだろうか、そ

の地で雩祭を行なったのであろうか。いや行なっていない、と馬氏は言う。

馬説によると、

一、漢代には雩祭が行なわれなかった。

二、雩祭は行なわれなかったが、前代の雩壇はまだ残存していた。

三、雩祭を行なうとすれば、国城の南の郊外で行なわれていた可能性を示唆している。

となる。馬氏の指摘にもある様に、漢代には数多くの祭祀が実施されているのに、果して雩祭は行なわれていなかったのだろうか。行なわれなかったとすれば、何故に実施されなかったのか。旱魃の心配は無かったのだろうか。それとも他の方法があったのだろうか。

二

漢代の雩祭について話を進める前に、今一つはっきりさせておかねばならない事がある。それは雩と旱の相違である。『春秋』の経・伝では、雩祭はよくとり上げられるが、経・伝には「(大)雩」の他に「(大)旱」が記録されている。その回数は雩祭の約半数を数える。経・伝に見える雩と旱とはどの様にちがうのだろうか。

『春秋』の桓公五年「秋、大雩」の公羊伝に、

大雩者何、旱祭也、然則何以不言旱、言雩則旱見、言旱則雩不見、何以書、記災也、

とあり、同僖公十一年の「秋八月、大雩」の穀梁伝に、

秋八月大雩、雩月正也、雩得雨曰雩、不得雨曰旱、

とある。経文の大雩に対し、『左伝』は桓公五年以外は全て、「無伝、

「無伝、書過」か或いは「旱^{カンナレバナリ}也」としている。これは正祭と告祭を

区別しているものと思われるが、旱と雩との相違の説明にはならない。公羊伝と穀梁伝によると、雩とは、旱魃に対する請雨の祭祀であるが、

旱と表記するだけでは雩祭（請雨の祭祀）を行なったかどうか不明である。しかし雩と表記すれば旱魃であった事がわかる。そして雩祭を行なって降雨を得た場合に「雩」と記し、降雨を得る事が出来なかつた場合に「旱」と記す、と説明している。すなわち、旱魃が発生し、

雨請いの祭祀を行ない、その結果幸運にも降雨があった場合が雩であり、降雨が無い場合が旱である。まさしく従来言われている通り、『春秋』に見える雩祭は告祭である事を示していると言えよう。

ところで、降雨を得ることが出来たとしても、降水量が少なく、旱魃を解消することが出来ない場合、昭公二五年の

秋七月上辛、大雩、季辛又雩、

や定公七年の

秋大雩、……九月大雩、

の二例がそれに当ると考えられる。

先の僖公十一年の穀梁伝に見える様に、雩祭を行なっても降雨が得られない場合が旱であるが、その一覧表が「表二」である。このうち(5)と(11)の二例は魯侯以外の衛侯と鄭侯である。魯は周公の関係から天子と同じ大雩の禮が許されていたといわれるが、それ以外の諸侯は、

〈表二〉 (5、11は左伝、他は經文)

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
昭公	宣公			文公					僖公	莊公
十六	七	十三	十	二	二十一	十九	三	二	三十一	
秋	自正月不雨、 至秋七月	自正月不雨、 至秋七月	自正月不雨、 至秋七月	自正月不雨、 至秋七月	夏	秋	夏	春	冬	冬
九月	大旱	大旱	大旱	大旱	大旱	大旱	不雨	不雨	不雨	不雨
鄭大旱、使屠擊等有事於桑山										

早魃に対して山川を祭祀の対象としていることが表からわかる。この点も既に先学の指摘する通りであるが、主題と直接関わらないので、先に論を進める。5・11以外の残り九例は、6・10とそれ以外の二つに大別できる。つまり、同じく降雨が得られぬ場合に、“旱”と“不雨”の記載例がある。そして、この相違について、7の文公二年の公羊伝に、

自十有二月不雨、至于秋七月、何以書、記異也、大旱以災書、此亦旱也、曷為以異書、大旱之日短而云災、故以災書、此不雨之日長而無災、故以異書也、

とあり、長期にわたって、降雨がなくとも災(被)害が発生しない場合、これが“不雨”であり、逆にいくら短期間であっても、災(被)

害が発生する場合が“旱”である。表二に見られるように、不雨は所謂の冬期或いは十月頃より一月頃にかけてで、穀物の収穫後の時期にあたるか、僖公三年左氏伝の杜預注に「於播種五稼無損」とあるように、五穀(穀物)の播種期前の時期にあたる。この期間は、丁度『禮記』の季冬に当り、次年度の農作業の準備をするために、農耕具の点検や修理する農閑期に相当する。

以上、今までのところをまとめてみると、“不雨”、“旱”の判定基準は、穀物に被害が及ぶか否かである。“旱”、“雩”の区別は、旱魃が発生し、そのままの状態が続くと、全く収穫が見込まれないか、或は大巾な減収が予想される時に、一刻も早く通常年の作柄への回復を願って、雩祭を実施し、その結果、首尾よく降雨を得ることができたのが、表一であり、うまくいかなかったのが、表二の6・9である。穀物の収穫という点から考えて、表一が、成公七年の特例を除いて、周正の秋三ヶ月(七・八・九月)に集中しているのは当然のことと言える。

三

『史記』、『漢書』に表われる旱魃(害)は、〈表三〉⁽¹⁾の通りである。

本紀と五行志とに重複するものを除くと、秦から前漢末迄に、合計二九回の旱魃が発生している。そして注目すべきことに、昭帝の始元六年に唯一の大雩が見えるだけであり、(但し、五行志は雩でなく、大旱となっている)それ以外は、全て旱、大旱である。二九回のうち、

〈表三〉

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
宣 帝	昭 帝	武 帝	太 始二	征和元	天漢元	元封四	元封四	元封三	元朔五	元光六	建元四	中元三	後元六	九	三	文 帝	惠 帝	始 皇		
本始三	元鳳五	始元六	太始二	征和元	天漢元	元封四	元封四	元封三	元朔五	元光六	建元四	中元三	後元六	九	三	文 帝	惠 帝	始 皇		
夏	夏	夏	秋	夏	夏	秋	夏	夏	春	夏	夏	夏	夏	春	秋	夏	夏	夏	夏	夏
大旱→郡國傷旱甚者、民毋出租賦(宣帝本紀) 〔大旱、東西數千里〕(五行志)	大旱(昭帝本紀)	大旱(昭帝本紀)〔大旱〕(五行志)	大旱(五行志)	大旱(五行志)	大旱(五行志)	大旱(武帝本紀)	大旱(武帝本紀)	大旱(武帝本紀)	大旱(武帝本紀・五行志)	大旱(武帝本紀)→遺謁者勸有水災、郡種宿麥、 舉吏民能假貸貧民者以名聞(武帝本紀)	大旱(五行志)	大旱(五行志)	大旱(五行志)	大旱(文帝本紀)	大旱(文帝本紀)	大旱(文帝本紀)→令諸侯無入貢、弛山沢滅 諸服御、損郎吏員、發倉庾、以振民、民得充 爵、(本紀)	大旱(文帝本紀)	大旱(文帝本紀)	大旱(文帝本紀)	天下大旱、六月至八月、乃雨(始皇本紀)

29	28	27	26	25	24	23	22
平 帝	哀 帝	成 帝	成 帝	成 帝	成 帝	元 帝	神 爵元
元始二	建平四	永始四	永始三	鴻嘉三	建始二	初元三	神爵元
春	夏	夏	夏	夏	夏	夏	秋
大旱(哀帝本紀)	大旱(五行志)	大旱(五行志)	大旱(成帝本紀)	大旱(成帝本紀)	大旱(成帝本紀)	大旱(元帝本紀)	大旱(五行志)
四月郡國大旱→青州尤甚、民流亡、安漢公四 輔三公卿大夫、吏民為百(姓)困乏、歛其田宅 者二百三十人、以口賦貧民(平帝本紀)							

春二回、秋四回の六例以外は全て夏であり、全体の八割弱に当る。
 これだけの「旱」の記録があるのだから、もう少し雩祭に関する記
 録があってもよさそうなのであるが、前述の通り一度だけである。
 『春秋』の筆法を以て、そのまま『史記』、『漢書』の文章に当てはめ
 る事は、問題が残るであろうが、旱、大旱の表記であるから、雩祭を
 行なったが降雨を得ることが出来なかったと考えることも可能であろ
 う。が表三の全てに降雨がなかったとも思われない。また、旱の表記
 であるので、被害が出ていると仮定すれば、何らかの救済措置が講じ
 られてもよさそうなのである。しかし、文帝の三年、後六年、武帝
 の天漢三年、宣帝の本始三年、平帝の元始二年の僅か五回にすぎず、
 旱魃の発生した翌年にも、旱魃が原因と思われる救済措置令は発布さ
 れていない。さらに、二九例中、春・秋の六例以外が、夏に集中して
 いることは、先の杜預注に示される様に、農作物の成長期に当って、

収穫高の減収に対して何らかの措置を講ずる必要のあった事を示していると言えよう。何故に救済策を發布しなかったのだろうか、また、この事は一体何を意味しているのだろうか。何故ならば、旱魃と同様に、農作物に大きな被害を与える洪水（水害）とは大いに様相を異にしているからである。

『漢書』等⁽¹²⁾に表われる洪水の記録は、詳細で且つ速やかな救済策が講じられている。これは、一つにはより直接的な被害が、人々の眼前に広がる水害と、天候の回復や農民のその後の努力によって、ある程度の回復が期待出来るかもしれない旱魃と、両者の性質の相違に依るのかもしれない。

兎も角、『史記』、『漢書』の表記は、早と大旱である。旱魃に対して全く祭祀を行なわなかったのだろうか。そのようなことは、農業に基礎をおいている社会では到底考えられぬ事である。

旱魃に対して、請雨を行なう事は前稿⁽¹³⁾で簡単に述べたが、前稿で挙げた以外にも行なわれていて、人々は旱魃の脅威から逃れようとするのが普通であろう。例えば、『史記』鄭世家の簡公二十七年の直前の箇所⁽¹⁴⁾に

山川之神、則水旱之舊祭之、日月星辰之神、則雪霜風雨不時祭之、とあり、また同趙世家に、

晋獻公之十六年、伐霍魏耿而趙夙為將伐霍、霍公求犇齊、晋大旱、卜之曰霍山為崇、使趙夙召霍君於齊、復之以奉霍太山之祀、晋復穰、とあるように、旱魃に際して山、川を祭祀の対象としていたことがわ

かる。また、表二の5・11の例等から考えると、春秋時代には、周や魯だけでなく、他の諸侯達も旱魃に対し雨請いを諸侯の国域で行っていた。否、諸侯達だけでなく、古代の人々にとって、旱魃の恐怖が尋常でなかったことは、『詩經』大雅雲漢篇⁽¹⁴⁾の示す通りである。この様に人々に大きな恐怖を与えた旱魃について、管見の及ぶ限りでは、戦国時代に発生した事を示す確実な資料は見当たらない。

前漢時代になると、董仲舒『春秋繁露』⁽¹⁵⁾の求雨第七四に

春旱求雨、令県邑以水日令民禱社稷山川、家人祀戸、無伐名木、無斬山林……昊天生五穀以養人、今五穀病旱、恐不成実、敬進清酒膊脯、再拜請雨、雨幸大澍……夏求雨、令県邑以水日、家人祀竈、無舉土功、更大浚井……季夏禱山陵以助之、令県邑十日壹、……四時皆以庚子之日、命吏民夫婦皆偶処、凡求雨之大体、丈夫欲藏匿、女子欲而樂……

とある。同じく漢代の事柄を示すものとして、『說苑』⁽¹⁶⁾卷十八、辨物篇に、

夫水旱俱天下陰陽所為也、大旱則雩祭而請雨、大水則鳴鼓而劫社、何也、曰陽者陰之長也、其在鳥則雄為陽、雌為陰……今大旱者、陽氣太盛以厭於陰、陰厭陽固、陽其填也、惟填厭之太甚、使陰不能起也、亦雩祭拜請而已、無敢加也、

とある。董仲舒、劉向二人の右の文章は、一瞥すれば、すぐ、陰陽五行説との関わりあいがあり、それで大旱、大雨等が発生する原因を説明して、正確なものとは言えない。しかし、旱魃に対して、請雨

（雩祭）が行なわれていた事を示している。『春秋繁露』によると、旱魃に対する雩祭は、春と夏であり、社稷、山川を祭祀の対象とし、県邑単位で行なわれた。さらに、各人がそれぞれの家単位で、戸や竈を水の日に祀っている。ただ両資料とも、旱魃が発生してから請雨を行なうのか、それとも正祭であるのかは不明である。

以上のように、前漢時代、雩祭は行なわれていたが、それは、県、邑や個人を単位にして行なわれたものであって、国家（皇帝）がとり行なうものではなかった。馬端臨が、漢代には雩祭は行なわれなかったと言うのは、この事を指しているのかもしれない。次に、雩祭が正祭であるのか、告祭であるのかは、資料が不足していて、遽かには決めることは出来ない。また、右の様な意味を含んで言うならば、『史記』、『漢書』の「（大）旱」という表記は、雩祭を行なったが降雨を得ることが出来なかったと言う、『春秋』の経、伝に見える雩祭の結果を記録したのではなく、実際に発生した旱魃を、事実として記録したものである。

四

『春秋繁露』では、雩祭の対象に、山川の他に社稷が見えている。県邑を単位として雩祭が行なわれるとすれば、社稷が対象となつていても不思議はない。しかし、先引の『通典』では、「旱になると、太常が天地、宗廟に祝す」と説明している。既に述べてきた様に、漢代では諸侯が雩祭を行なっている。また、雩祭の対象は山川や社稷であ

る。先秦に遡っても、対象は上帝乃至名山大川百源である。果して太常が雩祭を掌ったのだろうか、宗廟が祭祀の対象に加わったのだろうか。次にこの点について考えてみることにする。

『漢書』卷十九、上、百官公卿表上に、

奉常、秦官、掌宗廟禮儀、有丞、景帝中六年更名太常、属官有太常・太祝・太宰・太史・太卜・太醫六令丞、

とある。確かに太常は宗廟禮儀を掌るが、宗廟禮儀と雩祭との関係はいかなるものか不明である。『史記』卷二八、封禪書の高祖二年の条に、

悉召秦祝官、復置太祝太宰、如其故禮、因令県為公社、

とあり、高祖二年に、秦の祝官を召集し、太祝、太宰を再び置いて、故の儀禮を担当させている。この二年の設置は秦の祝官の範圍がどこまでを含むものか不明であるが、百官公卿表の奉常の六属官のうち、太祝、太宰だけを復活させ、残りの四属官を悉く廃止したのではなく、いくつかある秦の祝官の中から、太祝と太宰を選び出して、太常の属官に編入したように思われる。六属官のうち太卜は、のち廃止されており、太醫は少府にも属していたりして、属官はそれぞれ一つづつそのときどきに統廃合されたのではないだろうか。恐らく太常の六属官は、一度に同時に設置されたのではなく、徐々に整備されていったもので、太常の六属官というのは、職官体系が完成した時のものか、或いは最大に膨張した時の姿と思われる。

『漢書』百官公卿表では、「宗廟禮儀を掌る」で、今一つ明確でない

太常の職掌は、『後漢書』百官志一には、

太常、卿一人、中二千石、本注曰、掌禮儀祭祀、每祭祀、先奏其禮儀、及行事、常贊天子、

とあり、祭祀に當って、その禮儀次第を先に奏上し、天子の補佐役をつとめる。祭祀の統括責任者が太常である。その属官で、高祖の時に設置された太祝令は、『後漢書』百官志、二に

太祝令一人、六百石、本注曰、凡国祭祀、掌読祝、及迎送神、丞一人、本注曰 掌祝小神事、

とあり、祭祀の時に祭文を読みあげたり、神の送迎を掌っている。また同じく太宰令も、

太宰令一人、六百石、本注曰、掌宰工鼎俎饌具之物、凡国祭祀掌陳饌具、丞一人、

とあり、儀式での饌具を掌る。両者とも特に雩祭だけを掌るとは考えられない。むしろ、同じく百官志、二にある太史令に、

太史令一人、六百石、本注曰、掌天時、星曆、凡歲將終、奏新年曆、凡国祭祀・喪・娶之事、掌奏良日及時節禁忌、凡国有瑞応・災異、掌記之……靈臺掌候日月星氣、皆属太史、

とある。太史令は、天文星曆、国家の古禮、凶禮、嘉禮の良日や禁忌とともに、国家の瑞応や災異を掌り、記録する。文公二年の公羊伝にも「記異」とあったが、雩祭（請雨）は、言う迄もなく災異に属する現象である。また、百官志の文章からすると、瑞応や災異の発生を記録することだけを掌る様にも見受けられるが、さらにその下に靈台等

があり、請雨の職務は、太史令の守備範囲だと思われる。

百官公卿表や百官志に依ると、太常は、祭祀の最高責任者であり、その意味では、百官公卿表の宗廟禮儀を掌るといふのは的を得ている。しかし、雩祭との関係は、百官志の記載だけでは推測の域を出ない。そこで、別の資料から今一度考えてみる。

『後漢書』禮儀志、中の注引く『漢舊儀』に、

求雨、太常禱天地宗廟社稷山川以賽、各如其常牢禮也、四月立夏、早乃求雨、禱雨而已、後旱復重禱而已、訖立秋雖旱不得禱求雨也、とある。『漢舊儀』では、太常は、天地、宗廟だけでなく、社稷、山川を祭祀の対象としている。社稷、山川を請雨の対象とすることは、既に『春秋繁露』に見えている。このように太常に多くの祭祀対象が含まれるのは、祭祀が国家にとって重要な行事であり、且つ『漢官解詁』に、

太常、社稷郊時、事重職尊、故在九卿之首、

とある様に、祭祀儀禮を行なう際の最高責任者として、位置付けられているからではなからうか。そして、百官志に見える様に、太常の属官として、太史令、太祝令、太宰令、太子楽令（集解、明帝紀永平三年改太楽為太子楽令）がそれぞれの職務を遂行する。ただ、百官公卿表の段階以前漢時代では、まだそこまで完全に職務分掌が出来ておらず、太楽令以下太史令、太醫令までの総称として記されていた。祭祀に関する職務分担が、より明確になるのは、別稿でふれたように、やはり漢代の禮制が整備されていくのと関係があるのではないだろうか。

雩祭に関して、最高責任者としての太常の職務を記したものであれ、より直接の担当者である太史令の職務を記したものであれ、いずれにしても、雩祭は漢政府が行なうものである。しかし、現実の雩祭は、諸侯が行なっており、表三では、昭帝始元六年に一度だけ「大雩」と記されているが、五行志には見えず、また、太史令として有名な司馬遷も、雩祭については何もふれていない。ただ、太初元年の新曆採用に際し、明堂が建てられ、郡国の山川の神々が祭祀された⁽²²⁾ことが記されていて、僅かに請雨に関わることがあったらしき事を窺い知る程度である。さらに、山川を対象とする祭祀は、雩祭だけではない⁽²³⁾ことを考えれば、太初元年の「郡国の山川」の祭祀も、雩祭に限定するのは危険であろう。

以上、太常は国家の祭祀儀禮を掌る最高責任者である。それ故に、太常の祭祀の対象は宗廟、社稷から山川迄を含んでいて、雩祭も形の上で、太常の職の中にあっても別段不思議ではない。また、その属官で雩祭に直接関係あるとすれば、国家の瑞応、災異を記録を担当する太史令であると思われるが、実際に行なっていたかどうかは確認できない。但だ前節で見たように、諸侯が雩祭を行なっていたとすれば、前漢では太史令は、直接にかかわっていなかったと考えた方が妥当だと思われる。

五

先に引用した『春秋繁露』では、春、夏の旱魃に際し、祭祀を行な

うのは、国家ではなく、県や邑が単位となり、さらにその下では、各個人が単位となることが示されていた。漢代にはいり、漢王朝の基盤が強化されてゆくと、祭祀儀禮の多くは、皇帝主催となっていた。それでは、雩祭はどうであったのだろうか。次に、その点についてみてみよう。

『史記』卷二八、封禪書に、

孝文帝即位、即位十三年、下詔曰、……始名山大川在諸侯、諸侯祝各自奉詞、天子官不領、及齊・淮南國廢、令太祝盡以歲時致禮如故

とある。文帝の十三年になって、詔を下して始めて諸侯の国内にある名山・大川の祭祀は、諸侯自身が行ない、天子の祀官は関与しなかったが、齊と淮南国が廢れるに及んで、天子の太祝に歳時を以って祀らせた⁽²⁴⁾とある。この事は、もと諸侯の掌中にあった祭祀主催権を、何か口実をもうけては、国家に祭祀主催権を移行しようとすることを示しているといえよう。この様な祭祀主催権を移行しようとする傾向は、『集古錄』の後漢西獄山廟碑文に⁽²⁵⁾

漢西獄華山廟碑文文字尚完可読、其述自漢以來云、高祖初興、改秦淫祀、太宗承循、各詔有司、其山川在諸侯者、以時祠之、孝武皇帝修封禪之禮、巡省五獄立官、……

と記されている。漢の高祖以来の祭禮の変遷をのべる中で、秦代の淫祀を廢止し、太宗がこれを継承している。太宗が何帝であるのか、はつきりしないが、次に武帝が見えているから、恵帝、文帝、景帝のう

六

ちの誰かである。碑文の「太宗承循」の下句や『史記』封禪書の孝文帝即位十三年等の文章から考えて、この「太宗」は文帝を指すものと見て差し支えないだろう。文帝は有司に詔して、諸侯の国内にある山川を、時節をもって祭祀させようとするもので、封禪書と全く同じであることがわかる。

この様に見てくると、山川を祭祀の対象とする請雨（雩祭）は、漢初、諸侯や地方単位の祭祀であって、国家主催の祭祀の圏外にあった。しかし、その後になって、周代に行なわれていたかどうかわからない祭祀や秦代の祭祀の復活、秦代に行なわれていたかどうかかわからない祭祀や秦代の祭祀の廃止など祭祀の主導権は、諸侯の手から国家へと移動させようとする、つまり、漢の禮制がすこしずつ整備されるにつれて、秦的禮制が否定されていったと考えられる。⁽²⁷⁾

漢王朝は、秦末から楚漢戦争と続く混乱期の中で成立した。それ故に、諸侯の力を無視出事なかったのが漢初である。その様な中で、ともすれば莫大な費用を要する祭祀を、国家財政の基盤が確立していない時期に、国家が強力に国家的規模で行なおうとすれば、諸侯達の反発は必死であつただろう。漢代の最盛期を迎えていた武帝でさえも、一度にすべての禮制改革を行なうことが出来ず、順次に行なっていたことを考えれば、高祖・文帝は何んとかして祭祀の主導権を国家の掌中に収めようとする方向を示したと言える。文帝十三年の詔はその一つである。

漢初、祭祀の主導権を国家にとりもどそうとする計画は、別の形でも行なわれる。既に諸侯が主催していた雩祭を、強引に国家の掌中に移行するのではなく、諸侯の雩祭を認めながら、国家が主催する祭祀を創設する。『史記』卷二一八、封禪書に、

其後二歲（高祖八年）……於是高祖制詔御史、其令郡国県立靈星祠、常以歲時祠以牛、

とあり、高祖の八年に御史に詔し、御史に各郡国や県に靈星祠を立てさせ、毎歳季節に牛を供えて祠るようにさせた。高祖は、郡国と県にどれ位の靈星祠を立てさせたのか不明であるが、新しい祭祀を命じている。靈星祠とは、『史記』のこの条の正義引く『漢舊儀』によると、

五年修復周家旧祠、祀后稷於東南、為民祈農報厥功、夏則龍星見而始雩、龍星左角為天田、右角為天庭、天田為司馬、教人種百穀為稷、靈者神也、辰之神為靈星、故壬辰日祠靈星於東南、金勝為土相也、

と説明を加えている。周の旧祠の復活に、五年と八年の相違は見られるが、豊作祈願を后稷に結びつけていて、一面では、漢初の状態状況をよく示していると言えよう。すなわち、農業生産の安定、増収を計る為に、先農即神農災帝でなく后稷であり、秦王朝でなく周王朝との連続性を強調して、社会の安定をも目指したものであろう。

『左伝』桓公五年の条を、后稷と結びつけ、雩祭を靈星祠の祭祀に

しようとするものであるが、靈星を祠る様になる経緯について、二つの漢代の資料が存する。先ず、『風俗通義』、祀典第八、靈星に、

謹按祀典既以立稷、又有先農、無為靈星復祀后稷也、左中郎將賈逵說以為龍第三有天田、星靈者神也、故祀以報功、辰之神為靈星、故以壬辰之日祀靈星於東南、金勝木為土相、

とあり、『史記』封禪書引く『漢舊儀』と殆んど同じであるが、『漢舊儀』では不明確であつた最末尾の部分は、陰陽五行説の相勝説の影響を受けていることと、龍星と靈星の結びつけ、農功と関連付けようとしたのは、賈逵であることが判明する。もともと、龍星と靈星を結び付けたのが賈逵に始まるのか、それとも高祖時代の靈星祠を再びとりあげたのかわからない。いずれにしても、靈星祠を広めようとした高祖の計画は、あまり成功したとは言えない。第二の靈星を雩祭に結びつけようとする考えを示すものとして、『論衡』⁽³⁰⁾卷十五、明雩篇がある。少し長くなるが引用すると、

春秋左氏伝曰、啓蟄而雩、又曰龍見而雩、啓蟄・龍見皆二月也、春二月雩、秋八月亦雩、春祈穀雨、秋祈穀実、当今靈星秋之雩也、春雩廢秋雩在、故靈星之祀、歲雩祭也、孔子曰吾与点也、善点之言、欲以雩祭調和陰陽、故与之也、使雩失正、点欲為之、孔子宜非当与也、樊遲從遊、感雩而問、刺魯不能崇德而徒雩也、夫雩古而有之、故禮曰雩祭祭水旱也、故有雩祭、故孔子不譏而仲舒申之、夫如是雩祭祀禮也、雩祭得禮則大水、鼓用牲于社亦古禮也、得禮無非当雩一也、禮祭也、社報生萬物之功、土地広遠、難得辨祭、故立社為位、

主心事之、為水旱者陰陽之氣也、

とある。論旨は、『左伝』の啓蟄、龍見は春雩・秋雩に当り、春雩は穀物の成長と豊作を祈願するもので、秋雩は豊作を感謝するものである。秋雩は靈星に相当するが、現在（後漢）では、春雩は廢れてしまひ、秋雩だけが残っている。その雩禮は、孔子が曾皙や樊遲の雩禮の質問に賛意を表わし、董仲舒がそれを踏襲した。雩祭が禮に適えば降雨を得る。社は万物を生みだす功に報いるものであるが、土地が広大だと祭祀が及ばない。だからそれぞれに社をたてて、心から祈る、である。

王充の言う所に依れば、雩祭は昔からあつて、前漢時代にもあつた。その雩祭には、春雩と秋雩の二種類があるが、後漢時代には秋雩だけが存続しており、それが靈星祠に当る、と言う。つまり本来の雩祭である、旱魃に対し請雨するという面が消えて、收穫を祈るか、豊作を感謝する祭祀の側面が強くなっている。春雩より秋雩に重きが置かれるようになったのは、前漢時代であるのか、後漢時代に入ってから生じてきたのかわからないが、『禮記』玉藻の「至于八月不雨、君不舉」の鄭玄の注にも、

為旱變也、此謂建子之月不雨至建未也、春秋之義、周之春夏無雨、未能成災、至其秋秀実之時而無雨則雩、

とあるように、後漢時代は、收穫直前に雨がないうちに雩祭を行なう傾向が見られる。ただ、秋雩を靈星祠とする考え方は、王充以外に見えず、あまり一般的なものではなかったことを示している。これは、高

七

自立春至立夏盡立秋、郡國上雨沢、若少、郡県各掃除社稷、其旱也、公卿官長以次行雩禮求雨

禮儀志では、早魃になると、公卿が位序を以って、雩祭を主催する

ことが記されているが、この場合も恐らく前漢と同じく、太常が全体の責任者となり、その属官の太史、太祝等が実務担当官であったと考えられるが、やはりはっきりしない。

表四

15	14												13	12																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						</
----	----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----	----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24		23	22		21	20	19	18	17	16
										安 帝								和 帝		
		元初		元初		•	•	•		• 永初			•				永元	• 永元	章和	• 元和
五	三	二	元	七	六	五	四	三	二	元		十六	十五		九	六	四	二	二	元
夏			夏			夏	夏					秋			秋	夏		夏		春
三月、京師及郡国五旱（安帝本紀）→詔粟	四月、京師旱（安帝本紀・五行志）	五月、京師旱（安帝本紀・五行志）	三輔三歲田租、更賦、口算	五月庚子、京師大雩（安帝本紀）	五月、早（安帝本紀）	早	早	郡国八、旱→七月、皆令種宿麥蔬食、務尽地力、其貧者給種餉	五月、早（安帝本紀）	郡国八旱、分遣議郎請雨、	七月、早（和帝本紀）→七月、辛巳、詔令天下皆半入今年田租、蠲粟、其被災害者以美除之、貧民受貸種糧及田租、蠲粟、皆勿收責。	七月、早（和帝本紀）→七月、辛巳、詔令百姓錄寡漁采陂池、勿收飯稅二歲、	雒陽郡国二十二並旱、或傷稼、→六月詔令	林饒利、陂池漁採、以贍元元、勿收飯稅。	六月、早（和帝本紀）→戊辰朔、今年秋稼為蝗虫所傷、皆勿收租、更、蠲粟、若有所損失、以美除之、余當收租者亦半入、其山	七月、京師旱（和帝本紀・五行志）	早（和帝本紀）	郡国十四旱	早（五行志）	者粟、人五斛。 早→二月甲戌詔曰……到在所、賜給公田、為雇耕傭、貸種餉、實与田器、勿收租五歲、除算三年。

51	50	49	48	47	46			45	44	43		42	41	40		39	38	37	36	35			
		靈 帝			桓 帝												順 帝						
		熹平		延熹	元嘉			永熹	永和				陽嘉	永建			永建	• 延光	• 建光				
六	五	五	四	元	元			元	四	四		二	元	五		三	二	元	元	六			
夏	夏	夏	秋	夏	夏			夏	秋	春		夏		夏						夏			
四月、大旱（靈帝本紀・五行志作旱）	旱（五行志） ³⁴	四月、大雩（桓帝本紀）	七月、京師雩（桓帝本紀）	大雩（桓帝本紀・五行志）	京師旱（桓帝本紀・五行志）	無家屬及貧無資者隨宜賜卹、以慰孤魂、	潤沢、而宿麥頗傷……今遣使者案行、若	大旱炎赫、憂心京京、故得禱祈明祀、冀蒙	甲午、詔、朕以不德託母天下……自春涉、	四月壬申、雩（冲帝本紀・五行志）→五月	二月、自去冬旱、至于是月（順帝本紀）	八月、太原郡旱、民庶流元（順帝本紀） ↓癸丑、遣光祿大夫案行稟貸、除更賦	兗、須得澍雨 ³⁹	旱（順帝本紀・五行志）→三年、春二月己丑、詔以久旱、京師諸獄無輕重皆且勿考	二月、京師旱、庚申、勅郡國二千石各禱名山岳瀆、遣大夫、謁者詣嵩高、首陽山、并祠河、洛請雨、戊辰、雩（順帝本紀）	四月、京師旱（順帝本紀・五行志）→辛巳、詔郡國貧人被災者、勿收責今年過更、	存帛人一匹、	六月、旱（順帝本紀・五行志）→四年正月、丙子、賜鰥、寡、孤、独、篤癯、貧不能自	三月、旱（順帝本紀）	郡國五並旱、傷稼	能自存者穀、人三斛、	五月、京師旱（安帝本紀・五行志）	遭旱貧人、

56	55	54	53	52
		獻 帝		
建安十九	二	興 平	光 和	五
夏	夏	元 秋	六 夏	夏
四月、早（獻帝本紀）	四月、大旱（獻帝本紀）	七月、三輔大旱、自四月至于五月、帝避正殿請雨（獻帝本紀・五行志作長安旱）	大旱（靈帝本紀・五行志作旱）	四月、早（靈帝本紀・五行志）

合計五六回のうち、時節の不明確なもの八回、冬の一回を除くと、春七回、夏三三回、秋八回となり、前漢の八割弱には及ばないが全回数⁽³⁵⁾の六割弱が夏季に相当している。さらに秋を加えると、七割以上に相当する。この季節から、やはり穀物の成長期を中心に、穀実の時節、秋の収穫の減収が予想され、人々が不安に感じられる時期であることがわかる。ところで、表四から、前漢と大きな相違があることに気づくであろう。第一は、請雨や雩祭の記録であり、第二は救済措置の記録である。

前者については、表三と同じく、「旱」と言う表記が、雩祭を行なったが降雨を得ることが出来なかったのか、それとも旱魃発生の事実だけを記録したものが問題になるところである。ただ表三と異なるのは、光武帝の建武二年、章帝建初二年、順帝の陽嘉元年等に見られる様に、請雨の結果の雩（降雨）であって、『春秋』に見える「旱」「雩」の区別ではなくなっている。もちろん、請雨だけの表記もあって早計な断定は避けなければならない。次に、京師（洛陽）の旱や雩祭が多いことである。この事は、郡国の旱魃よりも京師の方が重要視されていて、京師の地方に与える影響を考慮されたものではなからうか。

後者の問題についてみると、旱魃発生の同年乃至翌年にかけて、旱魃に対する救済措置が数多く発せられている。そしてこの救済措置は桓帝時代迄である。これは言う迄もなく、桓帝の中平元年に発生した黄巾の乱により、以後衰退、崩壊にむかう後漢王朝と関係あると思われる。王朝の動向と関連することは、桓帝迄の救済措置も同じであろう。一般に言われるように、後漢王朝の成立当初は、赤眉等の農民反乱軍を平定すると同時に、多くの豪族が割拠し、建武年間の中頃迄は、その平定作業も並行せねばならなかった。その為に皇帝として封禅を行なったのは、光武帝の末年中元元年⁽³⁶⁾になってからであった。そして、光武帝を継いだ後漢の最盛期といわれる明帝、章帝、和帝の時代に、旱魃の救済策が数多く出されている。やはり王朝の基礎とも関係するであろう。

おわりに

以上述べてきたところをまとめてみよう。春秋時代、雩祭は天子だけでなく、諸侯も行っていた。資料の上では、雩、旱、不雨と区別されて表わされ、告祭としての雩祭が数多く見られ、雩祭の本来的性質をよく表わしていると言えよう。

その後、前漢時代にも雩祭は行なわれていた。しかし、戦国、秦の混乱を継承した前漢王朝初期は、一刻も早く国家の基盤を確立するために、諸侯達との無用の対立を避けようと、ある程度諸侯達に大きな権限を与えていた。もちろん雩祭を行なう権限も、国家にあるのでは

なく、諸侯がもっていて、諸国国域内にある名山大川を祭祀の対象としていた。しかし、いつ迄も諸侯の掌中に祭祀の主権を委ねて置くことは、漢王朝にとって好ましいことではない。他の祭祀儀禮と同様に、国家主催に切り換える口実を求める。早くは高祖の時の霊星祠であり、文帝即位十三年の詔であった。しかし、その後の経過を考えると、余り普及しなかったようである。恐らくそれぞれの諸国の地理的状况や気象条件に差異があり、また当該地方で生活する農民はより強く諸侯と結びついていて、国家が祭祀を行なうのに一律に参加する必要性をそれ程感じなかったからであろう。その意味では、「漢代には、雩祭は行なわれなかった」と言う馬端臨の説は正しいと思われる。

後漢王朝になると、郡県レヴェルで先ず行ない、それでも早魃が解消しないと、国家が主催するようになった。祭祀は、恐らく太常を長（最高責任者）として行なわれたと思われるが、具体的にどの官職がどの様に実施していったのか明確ではない。また、雩祭は早魃に対する祭祀であることは認められるが、正祭としての雩祭は、『漢書』、『後漢書』の記事に依る限りはつきりせず、特に前漢時代は認められない。

早魃に対して、前漢と後漢とは相違が認められる。後漢では、早魃に対して救済措置を發布したり、国家主催の雩祭が行なわれたりしている。前漢時代も、国家が農業に基盤を置いている以上、早魃に対して或いは早魃が発生すれば当然何らかの対応策を發布していたと思われるが、その点については、前漢時代から後漢時代に移行する過程

の中で、祭祀の主権は、何時諸侯から国家に移行するのか等を含め、もう少し詳細に別に論じなければならない。

注

- (1) 出石誠彦「支那上代の早魃と請雨」昭和十年七月（『支那神話伝説の研究』所収、中央公論社、昭和十八年、昭和四十八年増補改訂）秋田成明「雩祭について」（『支那学』十卷特別号、昭和十七年四月、池田末利「告祭考」中・5、雩 広島大学文学部紀要 二二、昭和三二年、周何「春秋吉禮考辨」嘉新水泥公司 民国五十九年八月
- (2) 拙稿「中国古代の祭祀」（国士館大学人文学会紀要 第十三号）昭和五十六年、八五～八七頁、
- (3) 前掲拙稿（八九～九十頁）では、雩祭を十八例としたが、同年の記事例えば「昭公二五年」の「秋七月上辛大雩……季辛雩」を一回と数えた為である。今、通例の計算に従い合計二二例に改める。尚『左伝』では、「哀公十五年、秋八月、大雩」の一例があつて、合計二二例となる。
- (4) 司巫「司巫……若国大旱則帥巫而舞雩」とあり、また女巫には「早嘆則舞雩……凡邦之大莪歌哭而請」とある。その他に地官の舞師、稲人等がある。
- (5) 正雩の時期について諸説がある。
建巳説……鄭玄、杜預、服虔、王肅、秦惠田、劉宝楠、
建午説（月令仲夏説）……顧容、金鶚、
その他の説については、池田 前掲論文参照。
- (6) 魯は諸侯であるが、周公の故を以て、天子と同じく上帝を対象とする。周何 前掲書、第四章 第二節、八一～八九頁参照。
- (7) 『通典』卷四二～卷四五の中で、雩祭の他に、卷四五の「方丘」も、

漢初因秦滅學、禮經在人間潛出所以祠祀未修典禮、とあり、大雩と方丘の祭祀だけ、漢初にはわからなかったことを記す。

(8) 現行本の『漢舊儀』には見えない。

(9) 『左伝』、『穀梁伝』は、一度とも雩祭に解するが、『公羊伝』は、秋七月上辛大雩、季辛又雩、又雩者何、又雩者非雩也、聚衆以逐季氏也、と、別の解釈をとる。

(10) 注(6)

(11) 表三は、出石氏、前掲論文、四六四頁、四八五頁の表を基礎にして、増減を加えて作製したものである。表四も同じ。

(12) 今村城太郎「漢書溝洫志私考—中国古代の黄河対策とその周辺—」日本文学文学部人文科学研究所研究紀要 9、一九七三、木村正雄「漢代における第二次農地の形成と崩壊—特に閩東を中心として—」、一九六〇(のち『中国古代の農民叛乱の研究』所収、東大出版会、一九七九、藤田勝久「漢代の黄河治水機構」水利史研究 第十六号、一九八六、

以上、いずれも黄河水系を中心のべられたものである。その他、

岑仲勉『黄河変遷史』北京人民出版社、一九五七、『黄河水利史述要』水利出版、一九八二、等もある。

(13) 注(2) 八五頁。また、表二の5、

(14) 雲漢篇の第一、二、三章に、倬彼雲漢、昭回于天、王曰於乎、何辜今之人、天降喪亂、饑饉薦臻、靡神不舉、靡愛斯牲、圭璧既卒、寧莫我聽○旱既太甚、蘊隆蟲蟲、不殄禮祀、自郊徂宮、上下奠瘞、靡神不宗、后禋不克、上帝不臨、耗斂下土、寧丁我躬○旱既太甚、則不可推、競競業業、如霆如雷、周餘黎民、靡有

予遺、昊天上帝、則不我遺、胡不相畏、先祖于摧、とある。第四章以下も「旱既太甚」の句で始り、旱魃に対する恐怖を歌う。

(15) 『春秋繁露注』清 凌曙注、(世界書局本)による。

(16) 『漢魏叢書』(明、程榮)本による。

(17) 『禮記』祭法に「諸侯為百姓立社曰國社、諸侯自為立社曰侯社、大夫以下成群立社曰置社」とあり、蔡邕『獨斷』上にも「諸侯為百姓立社曰國社、諸侯之社曰侯社」とある。その他『白虎通』、『周禮』小司徒等に見える。

(18) 百官公卿表補注引く齊召南は、

唐六典漢高名曰太常、惠帝復曰奉常、景帝又曰太常、與此表異、据史記叔孫通伝、高帝拜通為太常、漢官典職亦云惠帝改太常為奉常、則六典所云自確、班表蓋祇標其大略耳、

といい、太常は、漢初から存在していたとする。

(19) 『漢書』卷二五上、郊祀志、その他は、「悉召故秦祀官……」に作る。今、それに従って祀官とする。

(20) 『後漢書』では、『漢舊儀』となっているが、現在は『漢舊儀補遺』下(孫星衍校集本)に見える。

(21) 拙稿「禘祭・禘祭の成立について」、中国史研究、第八号 一九八四年、参照。

(22) 『漢書』卷六二、司馬遷伝に、

「當太初元年、十一月甲子朔旦冬至、天曆始改、建於明堂、諸神受祀、○張晏曰 以元新改、立明堂、朝諸侯及郡守受正朔、各有山川之祀、故曰諸神受祀、とある。

(23) 『通典』卷四六、山川 参照。周では四祭、迎氣、郊天 大蜡等も山川を対象としている。

(24) 『史記』卷十、文帝本紀には、淮南国の事件は見えるが、斉の廢れた理由については見えない。

(25) 『歐陽文忠公集』卷一三四、集古錄卷一、(四部叢刊本による。)

(26) 『通典』、『文獻通考』等に見える「大享明堂、社稷、朝日夕月」等がこれに当る。

(27) 注(21) 参照。

(28) 拙稿「梁府」について——特に成立年代とその背景について——(国士館大学文学部創設二十周年記念論集、昭和六一年)

(29) 現行本では『漢舊儀』ではなく、『漢舊儀補遺』、下、にあり、左文の様に文字に少し異同がある。(。印の部分)

漢五年、修復周室舊祀、祀后稷於東南、常以八月祭以太牢、舞者七十人、冠者五六三十人、童子六七四十二人、為民祈農報功、夏則龍星見而始耨、龍星左角為天田、右角為大庭、天田為司馬、教人種百穀、為稷靈者神也、辰之神為靈星、故以壬辰日祠靈星於東南、金勝為土相也、

(30) 四部叢刊初編本を用いた。但し、現行本『左伝』は「啓蟄而郊」に作る。

(31) 注(21) 参照。

(32) この注に楊終伝を引用して、

建初元年大旱、穀貴、終以為廣陵、楚、淮陽、濟南之獄徙者數萬人、吏民怨曠、上疏云久旱、孔叢曰、建初元年大旱、天子憂之、侍御史孔豊乃上疏曰、臣聞為不善而災報、得其應也、為善而災至、遭時運也、陛下即位日淺、視民如傷、而不幸耗旱、時運之會耳、非政教所致也、昔成湯遭旱、因自責、省政散積、減御損食、而大有年、意者陛下未為成湯之事

焉、天子納其言而從之、三日雨即降、とあり、建初元年にも大旱があったが、成湯の故事にならったところ運よく降雨を得たとある。

(33) 陽嘉二年(五行志) 注引く周舉伝に、

三年、河南、三輔大旱、五穀傷災、天子親自露坐德陽殿東廂請雨、とあり、本紀と別の記事(請雨)がある。

(34) 注引く蔡邕作伯夷叔齊碑に、

熹平五年、天下大旱、禱請名山、求獲蒼應、時處士平陽蘇騰、字玄成、夢陟首陽、有神馬之使在道、明覺而思之、以其夢陟狀上聞、天子開三府請雨使者、與郡縣戶曹掾吏登山升祠、手書要曰、君況我聖主以洪澤之福、天尋興雲、即降甘雨也。

とある。大旱の際、名山に祠ったところ、降雨の得た事を記してある。

(35) 春七回とは、春とだけ記したもの二回、二月一回、三月一回の計七回のことである。以下、夏十二回、四月一回、五月一回、六月一回の計十三回、秋は無く、七月一回、八月一回の計八回である。

(36) 『後漢書』光武本紀、下に、

中元元年、二月己卯、幸魯、進幸太山、……辛卯、柴望岱宗、登封太山、甲午、禪于梁父、

とある。光武帝は、建武三十一年のあと、中元元年と改元し、中元二年二月に崩じている。

(本学助教授・東洋史学)